日本建築学会大会学術講演梗概集
（北陸）　2019 年 9 月

多主体連携による観光地のプランニング手法としての「観光まちづくりオーラルヒストリー」
-東京都八王子市 高尾山地区での実践より-

オーラルヒストリー　観光地　学生会員　○甲田亮輔 *　正会員　川原　晋 **
歳時記　プランニング　同上　古谷梨伽子 *　同上　野田　満 ***
地域資源把握　非会員　中村優里****

1．研究の背景と目的

近年、我が国では団体旅行から個人旅行の時代になり、観光の目的や形が多様化している。また訪日外国人も、日本の歴史文化や生活文化への興味が高まっている。これらのニーズに応えるには、従来の観光地においても、観光事業者と歴史的文化や生活文化を支える住民などの非観光事業者が協力し、観光地域づくりついての将来像を共有することが必要であるが、取り組みが具体化するほど、観光の負の影響などへの懸念が先行して、関係者の理解や協力関係が進まない状況があることが指摘されている（川原 2017）。さらには、観光地として注目されると、行政の多様な部署が各施策で別々に地域に関わったり、外部事業者が参入するが、それまでの地域の取り組みへの理解が不十分なために課題が生じることも多い。また、観光推進のために、新たな観光資源の発掘が各地で取り組まれているが、それを活かした具体的な観光プログラムの「担い手」が見いだせないことも多い。これらの課題を踏まえると、観光地域づくり、観光地再生の初期段階の作業としては、地域のキーパーソン、地域資源に興味を持っている人、地域づくりに責任を持って取り組む人などの思いやこれまでの取り組みを聞き取り、行政、事業者、住民で共有していくことが今後ますます重要と考える。

そこで、こうした視点での社会調査として、本稿ではオーラルヒストリー調査に着目する。これは、資料や文献からではなく、地域住民や関係者からの聞き取りによって得られる証言をデータソースとしてそれらを整理・統合することで、地域の状況や歴史を紡ぎ出す方法であり、歴史学、民俗学分野で取り組まれ、まちづくり分野にも応用されている（後藤 2005）。

オーラルヒストリー調査を実際のまちづくりの現場で実践・検証した研究としては、調査結果をウェブ上のデータベースに整理した中神ら（2004）や、調査結果を元に当時の暮らしを再現する模型を製作した瓜生ら（2013）などがあるが、観光地域づくりに応用したものはない。本稿では、このオーラルヒストリー調査を応用し、観光地域づくりの推進に資する編集・成果物の作成までを「観光まちづくりオーラルヒストリー」という一連のものとしてパッケージ化することを意識した調査内容を報告する。そして、観光地域のプランニング手法のひとつとして、前述の初動期の課題に対してこれらの取り組みや成果物がどのように活用できるかを考察する。

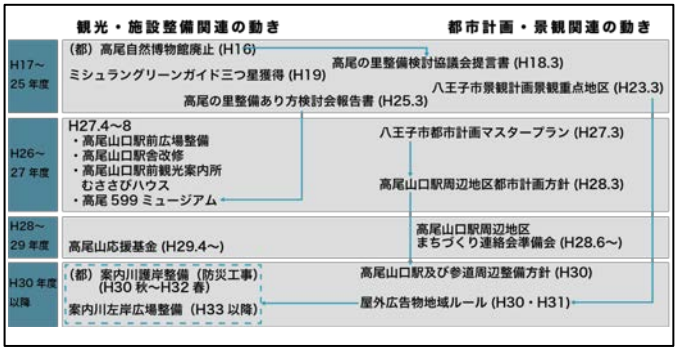


図１　高尾山口駅周辺のまちづくりに関する取り組みの経緯

2．高尾山地区の概要

東京都八王子市に位置する高尾山は、修験道の場として繁栄した高尾山薬王院を有する信仰の山として、近年まで講社という関東近県からの団体参拝で賑わった歴史ある観光地である。時の為政者に庇護され、現在も国定公園に指定されており自然豊かな環境が残る。2007 年にミシュランガイドで最高ランク三つ星の観光地として選出されてから、国内外のメディアや外国人からも注目を集め、年間 250 万人以上が訪問する、世界一登山客の多い観光地となった。特にミシュランガイド選出以降は、鉄道事業者による観光駅としての改良や温浴施設の開設など民間投資も盛んに行われている。

また近年の行政の動きとして、都立高尾自然博物館跡

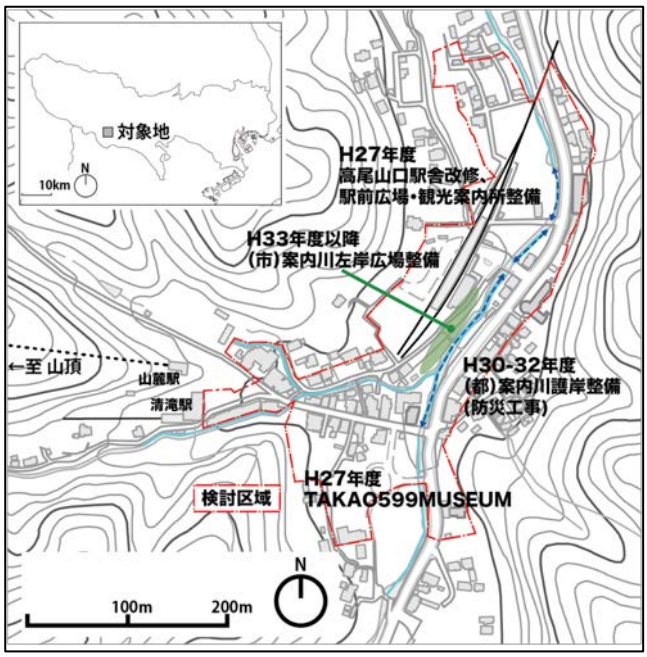


図２　高尾山口駅周辺で進められている事業

"Tourism Machizukuri Oral History" as a method of planning destinations through multi-party cooperation -from the practice in Mount Takao area -
KODA Ryosuke, FURUYA Rikako, NAKAMURA Yuri, KAWAHARA Susumu, NODA Mitsuru

地への TAKAO599MUSEUM 建設や高尾山口駅周辺地区都市計画方針策定などの取り組みが挙げられる（図１）。

こうした状況に適切に対応するため、地域の環境保全と観光振興の共存をめざして、公民学連携により策定した「高尾山口駅及び参道周辺整備方針」を元に駅前の案内川の護岸や左岸広場の工事（図２）が予定されており、公共空間再生に伴う土地利用変更、観光施設整備、景観ルール策定、水環境や公園整備、文化財活用などの多様なテーマで八王子市や東京都の行政部署が本地域に関与することが予定されている。

３．観光まちづくりオーラル・ヒストリー調査の内容

このように、多様な行政組織や事業や投資が入る本地区において、これまでの地域の取り組みや想いを関係者で共有するため、本調査を行った。聞き取り調査は、2018 年 6-8 月にのべ 32 名の地域の関係者を対象に、筆者ら大学教員・学生、および市都市計画課職員がチームで聞き取りを行った。

調査にあたって、地元に人脈のある複数のキーパーソンから紹介をもとに、これまで高尾山の観光や地域づくりに積極的に取り組んできた事業者、町会長、商店会や料飲組合の歴代の代表者、薬王院や神社の総代、鉄道事業者等、３０代から７０代の多様な世代、立場の人を調査対象として選定した（表１）。対象者は 1 人から最大 9 人のグループである。

調査は半構造化方式のインタビューによって行った。幼少の頃から今に至るまでの高尾山の山や川での遊びやまちとの関わりといった個人史、および個人の目から見た薬王院や氷川神社、お店やまちの発展や転機などについて、適宜地図や古写真を活用しつつ聞き取った。観光まちづくりにおけるオーラルヒストリーは、地域やその空間との関わりを通した個人史を追う点が特徴である。これによって、地域の資源や魅力をそこに深く関わってきた人と関連づけながら棚卸しし、今後の地域の取り組みやプロセスデザインのための足掛かりとして活用することを目指した。

４−１．調査の枠組み

調査結果は、図３の調査の枠組みに沿って整理・編集を行った。まず、インタビュー記録をテキスト化し、語り手による確認と補足の校正を加えたものを一次データベースとする。これを元に、独自に設定した 5 つの編集方針に則ってデータを編集し、観光地域づくりや観光戦略の立案に資することを意図した成果物を作成した。

４−２．調査成果物

調査成果物は、①オーラルヒストリー・インタビュー②高尾山フェノロジーカレンダー[注1]（歳時記）③個人史からつむぐ高尾山年表④観光まちづくりマップ⑤高尾山観光まちづくり史ストーリー・スライドの５つである（図４）。以下それぞれの成果物について詳述する。

① オーラルヒストリー・インタビュー記録：地域のキーパーソンが尽力してきたこと、大切にしてきたことに関する語りの雰囲気や思考の流れといった、文脈を切らない質的データとして伝えることを意図したインタビュー内容の要約記事である。今後地域に参画する新しい人材がこれらをあらかじめ理解することで、既存地域との良好な関係を築く効果を目指した。

② 観光まちづくりマップ／水・緑編、賑わい編：聞き取った情報のなかで、麓エリアの特定の場所に紐付いている内容を地図上に示した。幼少期の豊かな川遊びの

表１　インタビュー対象者の基本情報

グループ番号	人数	調査日	職業・役職
A	1	6月18日	地元町会会長
B	2	6月19日	飲食店店主・元ロータリークラブ会長
			美術館館長
C	2	6月26日	登山電鉄交通事業者
D	4	6月26日	氷川神社総代
E	1	6月27日	飲食店店主・地元料飲組合長
F	2	6月28日	地元町会相談役
G	9	7月10日	地元料飲組合若手役員
H	1	7月24日	地元町会会長
I	1	7月30日	交通事業者
J	1	7月31日	地元商店会会長
K	2	8月10日	土産屋店主
L	1	8月22日	薬王院用度部長
M	1	8月23日	飲食店店主・元地元料飲組合長
N	2	8月23日	飲食店店主
O	2	8月23日	飲食店店主

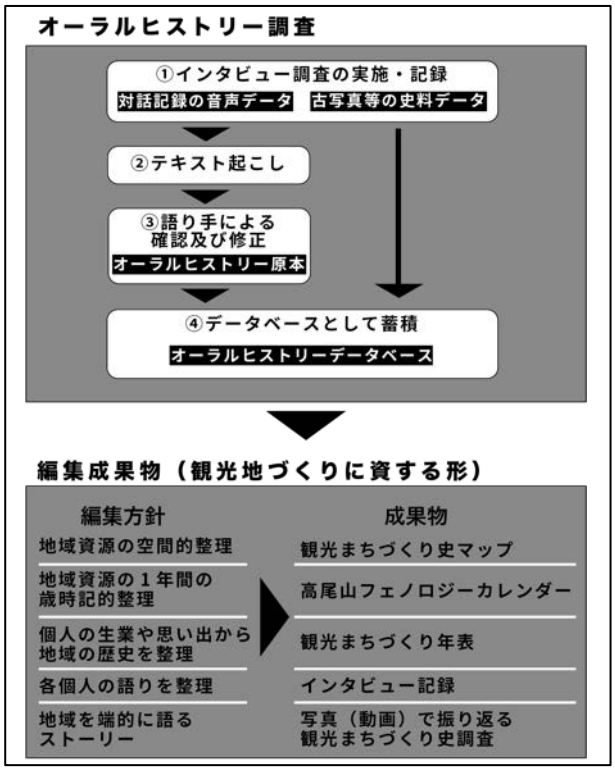
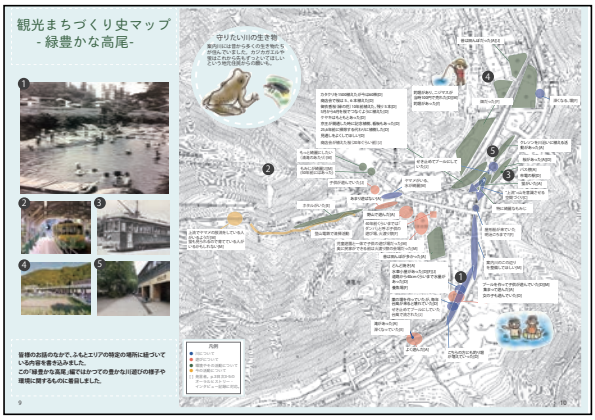
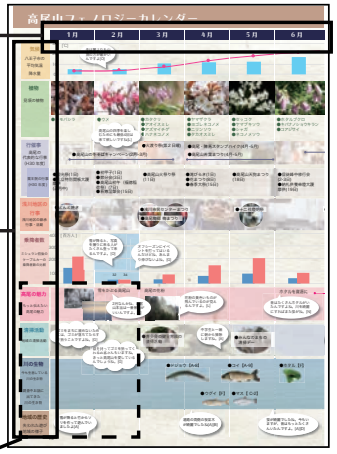


図３　観光まちづくりオーラルヒストリー調査の枠組み

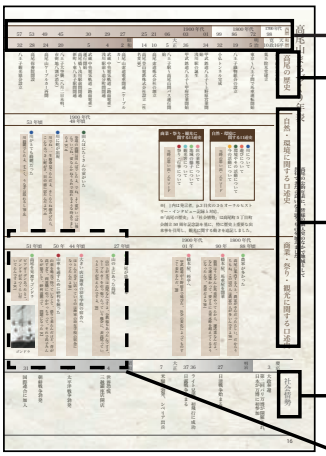
①オーラルヒストリー・インタビュー記録



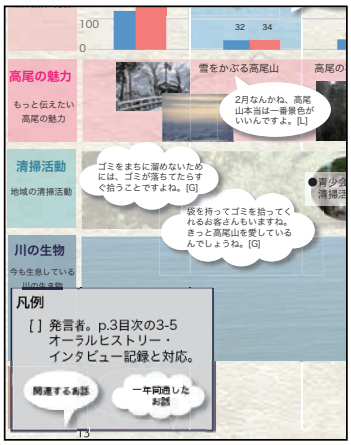
②観光まちづくり史マップ



③高尾山フェノロジーカレンダー



④観光まちづくり年表



※③の拡大図

⑤高尾山観光まちづくり史ストーリー・スライド

※④の拡大図

図４　高尾山地区で作成した編集成果物

様子、祭りの様子や動きなどが浮かび上がっている。空間的に整理することで、過去の様子を記録するだけでなく今後行われる予定である河川や公園といった公共空間の整備の際に、設計上重要な箇所を検討したり地域住民とのイメージ共有に活用することができる。

調査結果を「川について」、「遊びについて」、「環境やその活動について」、「今の活動について」、「店の業態について」、「地域の様子について」、「観光客について」、「祭り・行事について」に整理し、自然・環境に関するものと商業・祭り・観光に関するものに分類し２つの地図を作成した。

③　高尾山フェノロジーカレンダー（歳時記）：観光客の季節変動や地域の人的作業の変動を意識しながら観光戦略を立てることを意識し、観光入り込み客数や地域の行事、清掃活動などの日程と重ねながら、地元の方が語った地域の魅力資源を歳時記として表現した。フェノロジーカレンダー（歳時記）はエコツーリズム分野では地域資源を発掘整理する方法として用いられており、それをベースにしながら個人の語りを加えた点が特徴である。

高尾山の特徴や魅力資源として「気候」、「季節ごとの見頃の植物」「高尾の代表的な行事」、「薬王院の行事」、「浅川地区の行事」、「ミシュランガイド選出前後のケーブルカーの乗降者数」、「高尾の魅力」、「地域の清掃活動」、「川の生物」、「地域の歴史」を項目として設定した。

④ 高尾山まちづくり年表：市史等からわかる公的年表をベースに、聞き取った個人史やまちの変化、店の変化等、地域として共有したらよいことを加えた。まちの長期的な変化と個人史を照らし合わせることで、様々な時間スケールを考慮したまちづくり戦略の検討に活用することができる。

年表の項目として、「高尾の歴史」、「自然・環境に関する口述史」、「商業・祭り・観光に関する口述史」、社会情勢を設定した。口述史は更に細かく分類しており、その分類は調査成果物③高尾山フェノロジーカレンダーと対応している。

⑤ 高尾山観光まちづくり史ストーリー・スライド（実際には動画）：個人生活史、生業史を総合化して、地域の観光まちづくり史として短く文脈化し、数分で高尾山の観光まちづくり史の概要や想いを説明するものとして作成した。動画として編集することで、ワークショップや住民との対話の際に要点を簡潔に説明することができる。

なお、以上の成果物には、「語られたもの」としての吹き出し発言の表現ともに発言者が記号として示され、地域資源や課題への関心事項が人に関連づけられるようにした。立場や年代による経験や記憶、まちへの考えの違いについても把握できることを目指した。

６．編集・成果物の活用について

本調査結果は、「高尾山観光まちづくりオーラルヒストリー ～未来に紡ぎたい、暮らしとなりわいの個人史～」として冊子にまとめ、行政内と地域内に配布することを想定していたが、最終的には、行政や地元まちづくり協議会から高い評価を受け、高尾山口駅周辺および参道周辺整備方針（2019 年度前期策定予定）」の資料編として公式文書として行政 HP で公開されることになった。また、現在対象地区で推進中の、景観まちづくりワークショップや、水辺空間の再編と利活用検討するワークショップにおいて、これまで地元が取り組んできたことを紹介する資料として活用されている。

それらのワークショップの場では、過去の別施設の整備で検討したが実現できなかったことや、反社会的勢力と戦ってきた歴史、ゴミ持ち帰り運動の歴史など、これまでの地元の商業者や住民の皆さんの体験・経験から生まれた明文化されていない慣習やルール、公共空間での商売の仕方の慣習などが話題に上がり、なかなか外部の人間からはわかりにくいこれらの状況が、地域内外の人を含めた市民参加型の場で丁寧に考慮されながら検討されている。今後は、現在行われているワークショップを発展させたかたちで屋外広告物ルールと案内川左岸広場整備について考えるワーキンググループが発足し、それぞれ検討を進めていく予定である。こうした編集成果物の活用のフローについて、図５にまとめた。

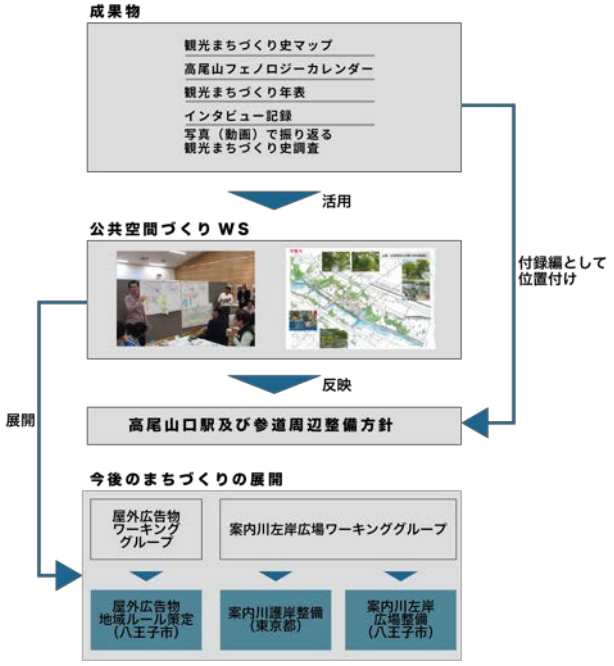


図５　編集成果物の活用フロー

この「観光まちづくりオーラルヒストリー」という一連の取り組みに対する観光地域のプランニング手法としての具体的評価はまだ時期尚早であるが、この調査プロセスと編集資料に基づく観光地域づくりの進め方は、地域のステークホルダーと当該地域の資源に関心のある地域外の人との理解共有、信頼関係を生む可能性があると考える。引き続き検証しつつ改良していきたい。

謝辞

本調査研究は、高尾山麓エリアの地域の皆様、東筑の事業に関わる八王子市役所および東京都の関係各課、鉄道事業者の皆様の多くのご協力を得た。記して謝意を表します。

本研究は JSPS 科研費 17H00901 の助成を受けたものです。

注釈

１）フェノロジーカレンダーについては参考文献５）に詳しい。

参考文献

１）川原晋（2017）「人口減少社会における観光まちづくりの可能性と進め方」，日本都市計画学会機関紙「都市計画 329 号」特集:人口減少社会を救う「観光まちづくり」,
２）後藤春彦・佐久間康富・田口太郎（2005）「まちづくり・オーラルヒストリー」水曜社
３）中神賢人・後藤春彦・田口太郎・山崎義人（2004）「口述史調査記録のデータベースシステムの開発に関する研究－まちづくり・オーラル・ヒストリーを事例として－」, 日本建築学会技術報告集第 20 号, 301-306
４）瓜生朋恵・梶木典子・上野勝代（2013）「住文化を継承するための暮らし再現模型の有効性－千里ニュータウンを事例として－」, 日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）, 1233-1234
５）日本エコツーリズム協会フェノロジーカレンダー研究会（2017）「地域おこしに役立つ！みんなでつくるフェノロジーカレンダー」, 旬報社

*首都大学東京都市環境科学研究科観光科学域　博士前期課程
**同　教授　***同　助教
****横浜市役所

*Master's Programs,　**Prof,　***Associate. Prof, Department of Tourism Science, Tokyo Metropolitan Univ.
****Local official, Yokohama City Office.